

上田市文化財調査報告書第72集

上沖（大沢）遺跡

国分産業団地造成工事に伴う発掘調査報告書

1998

上田市土地開発公社
上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第72集

上沖（大沢）遺跡

国分産業団地造成工事に伴う発掘調査報告書

1998

上田市土地開発公社
上田市教育委員会

序

上田は、長野県の東に位置し、古くから東信濃の中心地として栄えてきました。古代においては、信濃国分寺が創建されており、さらに信濃国府も置かれていたと考えられています。中世においては、後に信州の学海と呼ばれるほどの学問の中心地となり、鎌倉時代には信濃国の守護所が置かれていたと考えられています。近世においても、上田城を中心とした城下町が繁栄していました。上田は、この様に古代から現代に至るまで、地域の政治・経済・文化を担ってきました。その軌跡を知る手がかりは、有形文化財・無形文化財及び埋蔵文化財によるところが大きいと思われます。

この度、国分産業団地造成工事の箇所に埋蔵文化財が存在することが判明したため、工事施工に先立ち緊急発掘調査を行いました。調査の結果、古墳時代や平安時代・中世の集落・墓域が確認され、当時の生活景観が僅かながらも知ることができました。

近年、様々な開発に伴って発掘調査が行われていますが、そのほとんどが破壊を前提とした「記録保存」のための発掘調査であり、残念ながら調査後姿を消してしまうのが現実です。それ故、現在及び未来へ向けてできる限りの記録を残しておくことが、私どもの責務であると確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業・報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただきました上田市土地開発公社、関係諸機関、連日熱心に調査に参加して下さった方々、関係研究者の皆様に対して心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成10年8月

上田市教育委員会 教育長 我妻忠夫

例　　言

- 1 本書は、長野県上田市大字国分字上沖（大沢）における上沖（大沢）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国分産業閉地造成の実施に先立ち、上田市土地開発公社の委託を受けて実施した。
- 3 調査は、上田市（上田市教育委員会文化課）が直営で実施した。
- 4 調査は、発掘調査から遺物整理・報告書刊行まで含めて1997年（平成9年）4月14日から1998年（平成10年）8月31日まで実施した。
- 5 遺構の実測は尾見智志・小笠原正・松野ひろみ・相馬敬子・高木めぐ美・田畠しづ子・横井順子が行い、一部を新日本航業に委託した。トレースは保屋野道子・松本裕子・山浦幸子が行った。
- 6 遺物整理・復元作業は松野ひろみ・相馬敬子・高木めぐ美・田畠しづ子・横井順子が行った。
- 7 遺物の実測は小笠原正・上原祐子・田村雄二が行った。トレースは保屋野道子・松本裕子・山浦幸子が行った。
- 8 本文の執筆は尾見智志が行った。遺構・遺物の観察も尾見・松野ひろみが行った。
- 9 版組みは尾見智志・保屋野道子・松本裕子・山浦幸子が行った。
- 10 遺構・遺物の写真撮影は尾見智志・松本裕子・松野ひろみが行った。
- 11 調査に係る基準点測量はあさま測量設計株式会社に委託した。
- 12 調査に係る資料は上田市立信濃國分寺資料館に保管してある。
- 13 本書の編集刊行は事務局（上田市教育委員会文化課）が行った。
- 14 本書が刊行されるまでは、多くの方々や諸機関のご理解・ご協力を賜った。以下、ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）
長野県教育委員会文化財保護課・上田市土地開発公社・市川隆之・河西克造・川崎保・児玉卓文・塙人秀敏・柳澤亮・和根崎剛
- 15 本調査に係る事務局の体制は次のとおりである。

教育長	我妻忠夫
教育次長	宮下明彦
文化課長	川上 元
文化財係長	岡田洋一（平成10年5月1日退任）
	細川 修（平成10年5月1日着任）
文化財係	中沢徳士・尾見智志（担当）・塩崎幸夫・久保田敦子・久保田浩・西沢和浩・山喜敦子・清水彰・小笠原正（担当）・望月貴弘（嘱託）・古野明子（嘱託）・松野ひろみ（嘱託）・須齋千恵子（嘱託）
- 16 発掘調査・整理作業に参加・協力していただいた方々（順不同・敬称略）

・ノ瀬貞美・上原祐子・岡崎庄平・尾沢正江・金澤修治郎・川上けい子・甲田五夫・小松みつ子・小山信子・酒井禮子・佐野和男・鈴木義房・相馬敬子・高木めぐ美・高桑豊治・滝澤章子・滝沢七郎・田畠しづ子・田村雄二・塙原和子・中沢由美子・中島昭吾・西沢勝・西沢貞雄・保屋野友延・保屋野道子・松本裕子・柳沢栄治・山浦幸子・山崎透・吉敷美根子・吉敷良一・横井順子
--
- 17 土層及び出土土器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準上色帖」1997年度版を使用した。
- 18 陶磁器については、市川隆之氏に鑑定をお願いした。

< 目 次 >

第一章 調査の経過		
第一節 調査の経過……1	第二節 調査日誌（抄）……1	第三節 報告書抄録……2
第二章 遺跡の環境		
第一節 自然的環境……3	第二節 歴史的環境……3	
第三章 遺跡の調査		
第一節 遺跡の概要……5	第二節 遺構・遺物観察表……23	第三節 まとめ……28
付 論……29	写 真……35	

第一章 調査の経過

第一節 調査の経過

上田市土地開発公社が実施する国分産業団地造成に先立ち、平成9年2月24日から2月27日まで試掘調査を実施した。その結果、遺構が確認された。直ちに、保護協議を実施して平成9年度に発掘調査を実施する事とした。

（1） 平成9年度の経過

本年度に係る発掘調査は総事業費17,300,000円にて行われた。発掘調査は平成9年4月21日から平成9年7月8日まで行った。整理作業は平成9年7月7日から平成10年3月20日まで行った。

（2） 平成10年度の経過

本年度に係る整理作業・報告書作成作業は総事業費1,450,000円にて行われた。作業は、平成10年4月20日より行われた。平成10年8月31日には本書を刊行して調査を終了した。

第二節 調査日誌（抄）

（1） 平成9年度

1997年（平成9年）

- 4月21日 調査着手。表土剥ぎ。
- 4月22日 遺構検出作業開始。
- 5月30日 遺構掘り下げ開始。
- 7月7日 トータルステーションによる遺構実測。撤収開始。整理作業開始。

1998年（平成10年）

- 3月20日 平成9年度の作業を終了。

(2) 平成10年度

1998年（平成10年）

4月20日 国分寺資料館にて整理作業・報告書作成作業開始。

8月31日 報告書刊行。

第三節 報告書抄録

ふりがな	うわおき（おおさわ）いせき						
書名	上沖（大沢）遺跡						
シリーズ名	上田市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第72集						
編著者名	尾見智志						
編集機関	上田市教育委員会						
所在地	〒386 0025 長野県上田市天神二丁目4番74号 TEL0268(23)5102						
発行年月日	1998年8月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
上沖（大沢） 遺跡	上田市 大字国分 字上沖	市町村 20203	遺跡番号	36° 23' 5" 138° 16' 35"	1997年 4月21日～ 7月8日	6,500 m ²	産業団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上沖（大沢） 遺跡	集落跡・墳 墓跡	古墳時代中期 平安時代前期 平安時代終末	堅穴住居3軒 掘立柱建物12棟 土坑他	土師器・須恵器・石 器・鉄器他	平安時代終末のムラ の跡。		

第二章 遺跡の環境

第一節 自然的環境

上田盆地は、そのほぼ中央を流れる千曲川により川東地方と川西地方に二分されている。この千曲川は幾つかの段丘面を形成している。主なものにはⅠ面（虚空蔵山面）、Ⅱ面（染屋面）、Ⅲ面（上田城面）がある。国分付近では千曲川に神川が流れ込み為に、さらに幾つかの小段丘面を形成している。

当該遺跡は、この染屋台と呼ばれるⅡ面（染屋面）の南西端に位置している。この台地は現信濃國分寺面との比高差が約20mある。台地は、染屋疊岩層により構成されており、段丘崖には砂礫が露出している。その下層には新期上小湖成層が堆積している。

染屋台には大きな河川がなく、当該遺跡では土砂の堆積があまり認められない。但し、台地上が条里水田跡と考えられるほど古くから開発された水田地帯であるためか、水路が発達しており粘土質の灰黄褐色土が厚く形成されている場所もある。基本土層は5層に分けることができる。遺構は第4層に掘り込まれた状態で確認できた。

第二節 歴史的環境

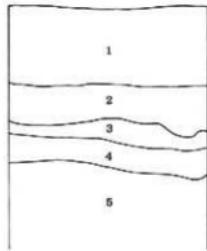
国分寺周辺は、繩文時代から人間の痕跡を確認することができる。浦沖遺跡では、中期の加曾利E式土器や後期の堀之内式土器・加曾利B式土器が出土している。前田遺跡でも中期の加曾利E式土器が確認されている。また、北陸新幹線建設に伴う国分寺周辺遺跡群の調査においても西沖遺跡から前期後葉・中期後葉・後期の土器などの遺物が出土しているが、遺構は確認できなかった。弥生時代の遺跡は上沢沖遺跡・仁王堂遺跡・堀遺跡・西沖遺跡・堂西遺跡・赤塚遺跡・常入遺跡群・中常田遺跡・堀之内遺跡から箱清水式土器が確認されている。常入遺跡群の下町田遺跡からは1997年の発掘調査により箱清水式期の集落が確認されている。西沖遺跡についても、県埋蔵文化財センターの調査により堅穴住居や溝が確認されている。また、同遺跡からは古墳時代後期を中心とした大集落も確認されている。この地には奈良時代に信濃國分寺が創建されている。この事を考えあわせると大変興味深い。古墳は、Ⅲ面（上田城面）に西沖第1・2号古墳や道場第1・2・3号古墳がある。Ⅱ面（染屋面）には向田古墳がある。奈良・平安時代には信濃國分寺が創建された。その北側には信濃國分寺瓦窯がある。また、周辺には上沢沖遺跡・浦沖遺跡・大沢遺跡・古城遺跡・堂浦遺跡・原敷遺跡・仁王堂遺跡・明神前遺跡・堀遺跡・堂西遺跡・西沖遺跡・赤塚遺跡・英遺跡・中常田遺跡・常入遺跡群がある。古城遺跡では、1997年の発掘調査により9世紀後半と11世紀前半の堅穴住居・掘立柱建物が確認されている。西沖遺跡でも、奈良・平安の集落が確認されている。中世には染屋城跡がある。これは、小河川で沢が入り込んだ崖端を2条の堀で台地と区画して造られている。その他に、連海塚・センカ塚などの墳墓と言われている塚もある。また、大字上沖・大沢の地籍は旧堀村の飛地であった。

<参考文献>

- 上田市教育委員会「上田市の原始・古代文化」1977
- 上小理科教育研究会「上小理科物語」1998
- 長野県埋蔵文化財センター「北陸新幹線2-上田・坂城」1998
- 長野県地名研究所「復元『信濃國繪図』第一巻小縣郡篇」1994



0 1km



- 1—耕土 (耕作土)
- 2—灰黄色 (loamy/s) にぶい黄褐色土 (loam
y/s) を含む。
- 3—褐灰色 (loamy/s) 褐色土 (loam/s)。
炭化物を含む。
- 4—褐色 (loam/s) 硅褐色土 (loam/s)。
含む。
- 5—褐色 (loam/s) シルト質。暗褐色土 (loam/s)。
炭化物を含む。

第2図 基本土層

番号	遺跡名	時代	所在場所
1	大字遺跡	新石・平安	大字横谷字大河
2	古墳遺跡	平安	大字横谷字古墳
3	動植物共生本田跡	古代?	大字横谷・古葉・佐喜・上野
4	所分遺跡	古文・平安	大字横谷字上井川・千浦・常盤・河原・御橋
5	仙台寺附近遺跡群	古文・平安	大字横谷字前川・松原・奥田・御橋・河原・佐喜・仁王堂
6	保良原分水跡	春秋～平安	大字横谷字下井川・保良・御橋
7	大入遺跡群	春秋～平安	大字大入字高木田・西河原・上河原・下河原 ・福之原・藤之原・久高原・坂原・柳原・寺 ノ原・竹原・北野原・鍋原・坂原・大原・黑 原・上井川・保良・御橋・河原・佐喜・仁王堂
8	向日古墳	古墳	大字古日字古墳
9	高瀬跡	平安	大字古日字高瀬
10	集落跡	中古	大字古日字集落
11	遺跡群	中古	大字横谷字古跡
12	西井古墳	古墳	大字横谷字西井

第1図 遺跡位置図



第3図 調査位置図

第三章 遺跡の調査

第一節 遺跡の概要

上沖遺跡は、「上田市の原始・古代文化」（上田市教育委員会・1977）によると「大沢遺跡」として記載されている。しかし、「市内遺跡VI」（上田市教育委員会・1997）によると「字名は、旧来は『大沢』であったが、ほ場整備により、「上沖」となっている。」として遺跡名を「上沖遺跡」としている。そのことを踏まえて、本報告書では「上沖（大沢）遺跡」と記載して混乱を避けることとした。

当該遺跡は、染屋台の南西端に位置し旧字名大沢が示すとおり小河川により台地の一部が谷状に浸食されている。この様な台地の端部に小規模な遺跡が営まれていたと考えられ発掘調査に至った。

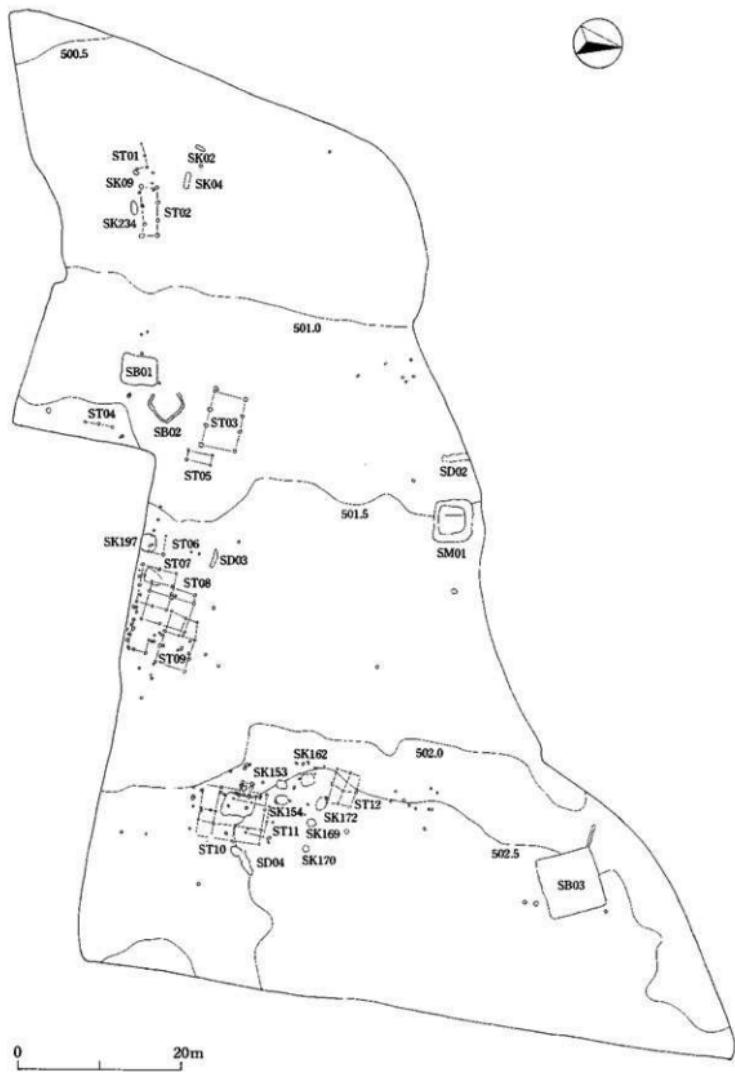
調査では、堅穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などが検出された。これらは、出土遺物から①古墳時代②平安時代③平安時代終末から鎌倉時代初頭④その他の時期に分類することができる。

①古墳時代の遺構は堅穴住居（SB03）が確認されている。堅穴住居の壁際に排水溝と思われる周溝をもつ。この溝は北西隅から直線的に延びている。また、地床炉をほぼ中央部にもつ。出土土器には、小型甕が2点（第25図18・19）確認できる。台付甕（第25図17）も確認できる。鉢（第26図21・22・24）は身が深く、口縁部は直立する。高杯（第26図25・26）は脚部に円形透窓をもつ。石器は、砥石などが出土している。鉄器片も出土している。

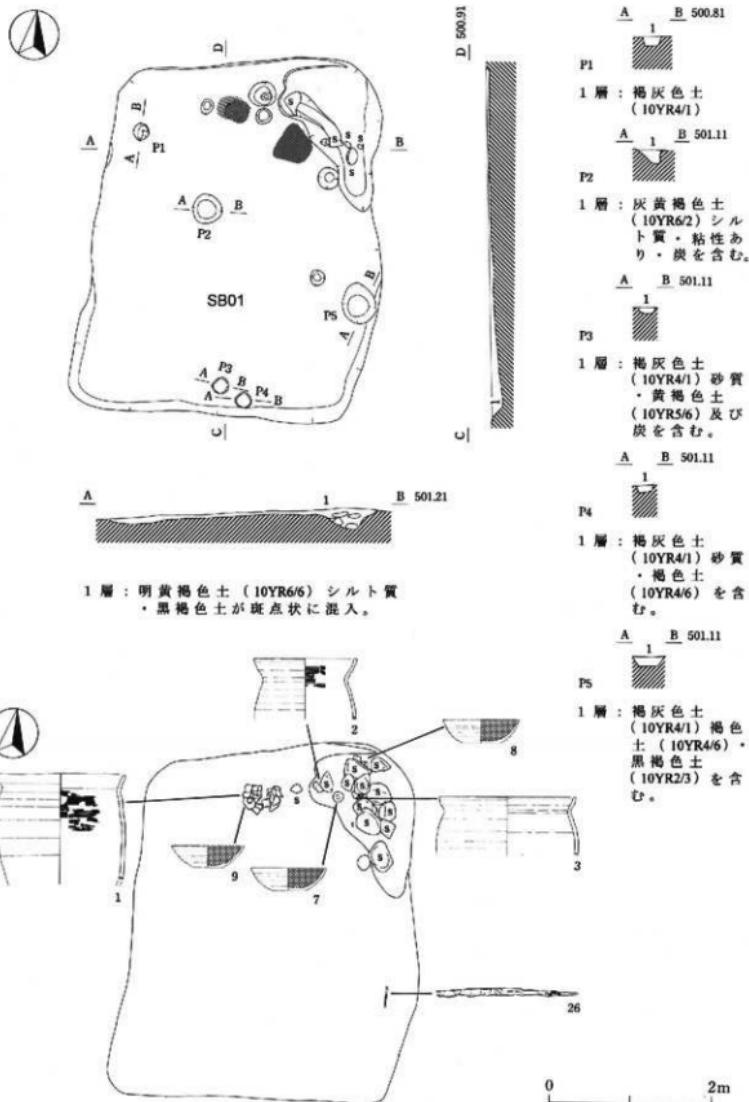
②平安時代の遺構は、堅穴住居（SB01・02）・掘立柱建物（ST03・06・07・08・09）と土坑墓（SK02・04・09・234）が確認されている。堅穴住居（SB01）からは、北信型のロクロ甕（第25図1～5）と土師器の坏（第25図7～16）が出土している。北壁のカマドの右には不定形の土坑があり、カマドの構築材であったと思われる人頭大の石が遺棄されており、その間に土師器の坏がほとんど割れずに残っていた。鉄器は刀子（第28図26）がほぼ完全な形で床面から出土している。これらの出土遺物から当該堅穴住居（SB01）は平安時代（10世紀後半）のものと思われる。また、掘立柱建物（ST03）は堅穴住居（SB01）と同時期のものと思われる。土坑墓（SK02・04・09・234）は、耕作による削平を受けており底部が僅かに残っていた。骨片と刀子と思われる金属の破片が出土している。これらも、堅穴住居（SB01）と同時期のものと考えることができる。

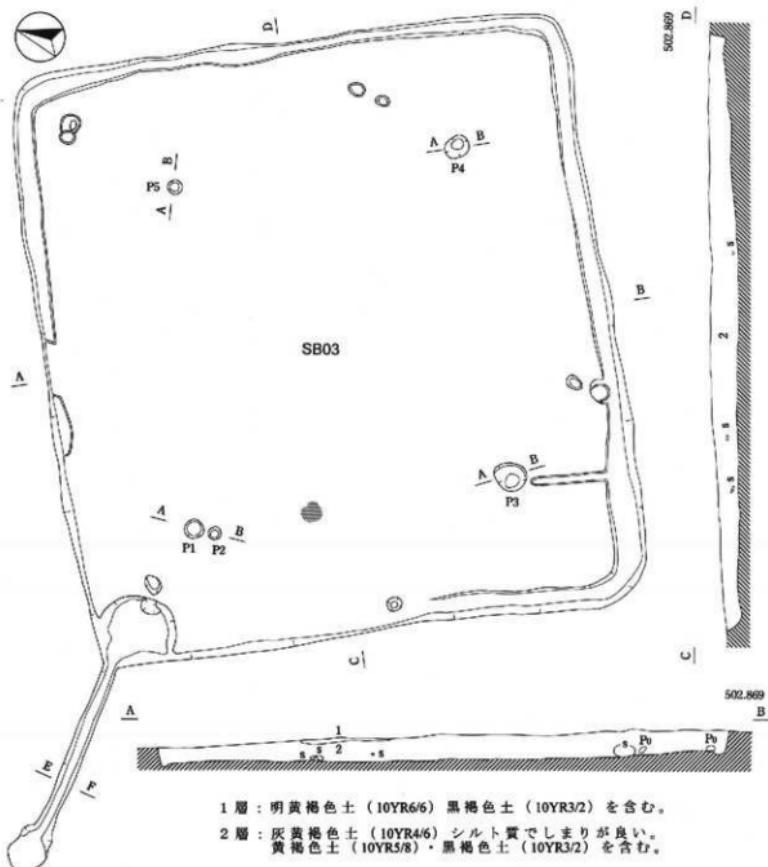
③平安時代終末から鎌倉時代初頭の遺構は掘立柱建物（ST10）とこれに伴う土坑（SK152）を中心となる建物と思われる。土坑（SK152）からは龍泉窯の青磁碗（第26図37・38・39）や同安窯の青磁碗（第26図34）・山茶碗（第26図36）が出土している。これらの遺物から12世紀後半から13世紀初頭の遺構であると思われる。また、土坑（SK152）には、人頭大の石が多量に投げ込まれていた。その中には、砥石として使用したと思われるほど磨かれていたものや意識的に割っているものも確認された。ST11・12・SK153・154・162・169・170・172も同時代の遺構と思われる。土坑（SK153・154・162・169・170・172）は底の浅い皿状のものであった。また、塚（SM01）は「センカ塚」と言われているものと同一であると思われる。調査時にはすでに削平されて水田となっており地表からは確認することができなかった。方形の周溝からは拳大の石が多量に出土している。これは、埴丘を覆っていた礫が崩れて周溝に落ち込んだものと考えられる。その中に鉄片・骨片も混じっていた。周溝の内側には埋葬施設等の内部施設は確認する事ができなかった。中世の墳墓或いは信仰の塚と思われる。

④その他の遺物として弥生時代後半の箱清水式土器や中・近世の陶磁器の破片などが調査地区から出土している。箱清水式土器の破片は多く、付近に遺構の存在が示唆される。



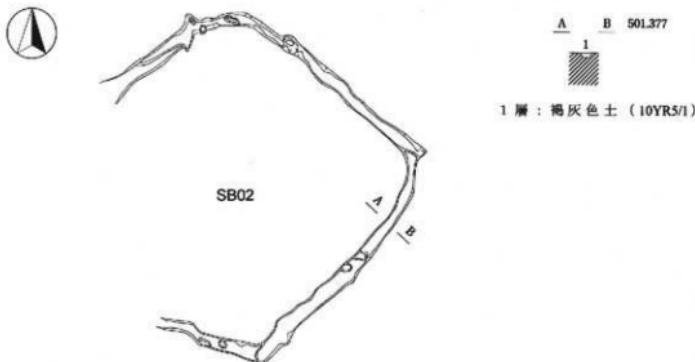
第4図 調査地区全体図



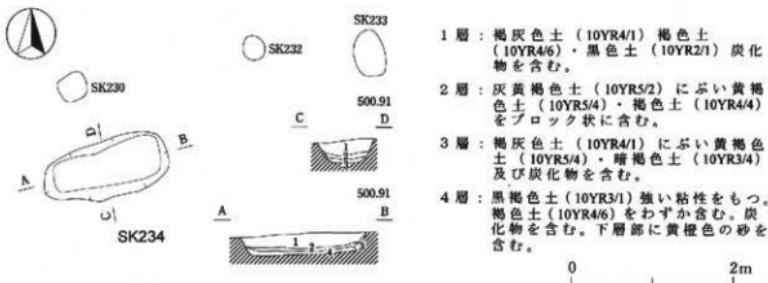
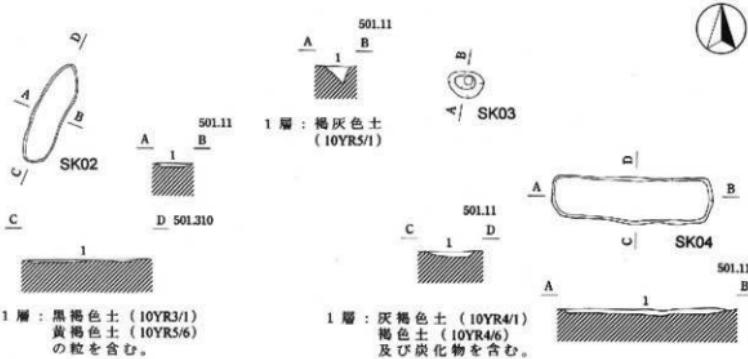


A	B 502.569	A 212 B 502.469	A	B 502.669	A	B 502.941	E	F 502.569
P1	1 1	P3	2 1 2	P4	1	P5	1	1
1層：褐灰色土 (10YR4/1) サ質 ・暗褐色土 (10YR3/4) 及び 炭化物を含む。 P2 1層：褐灰色土 (10YR4/1) 塗色 上にぶい黄褐色土 (10YR4/4) 及び炭化物を 多く含む。	1層：黒褐色土 (10YR3/1) 塗色 士 (10YR4/4) 及び炭化物を 多く含む。	1層：褐灰色土 (10YR4/1) にぶ い黄褐色土 (10YR2/2) シルト質でしま りが良い。 P3 1層：黒褐色土 (10YR4/3) を含 む。	1層：黒褐色土 (10YR2/2) シルト質でしま りが良い。	1層：褐灰色土 (10YR4/1) にぶ い黄褐色土 (10YR4/3) ・少 量の炭化物を 含む。	0	2m		

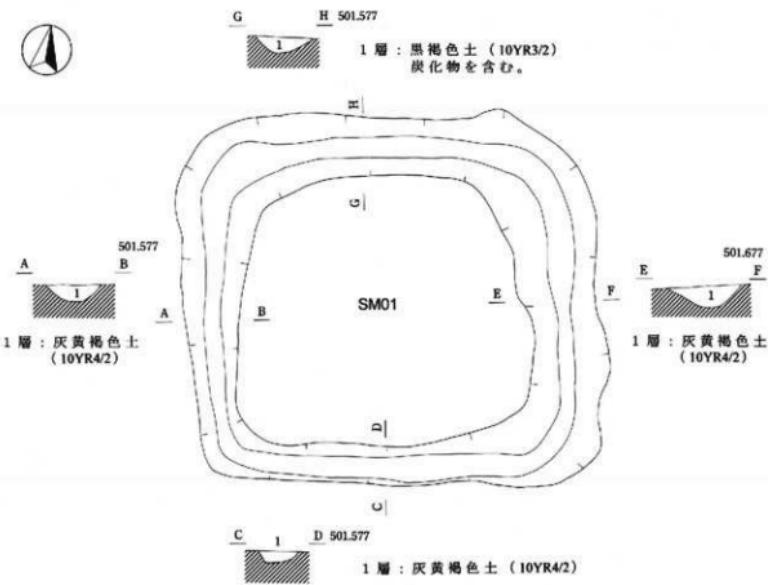
第6図 3号住居跡



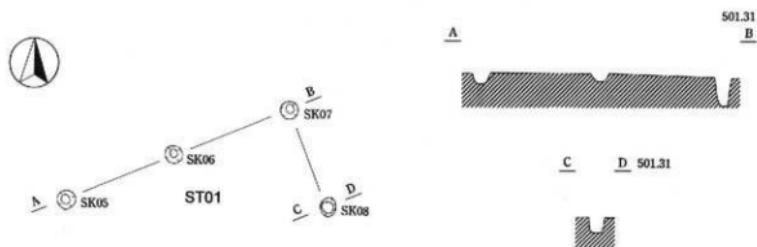
第7図 2号住居跡



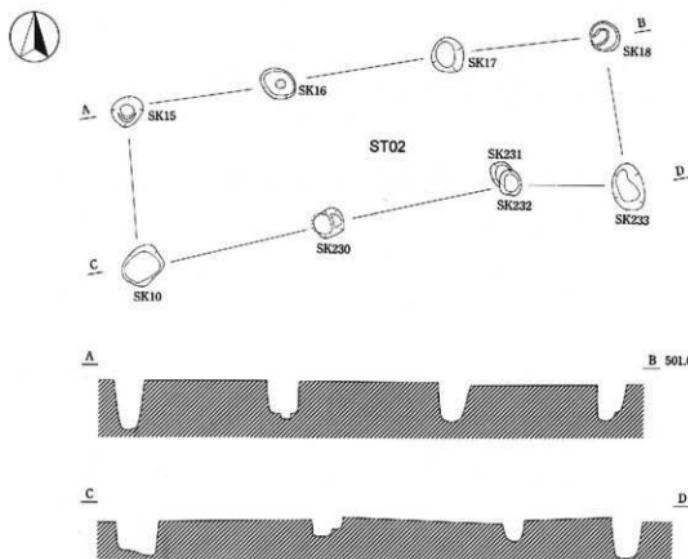
第8図 土坑墓



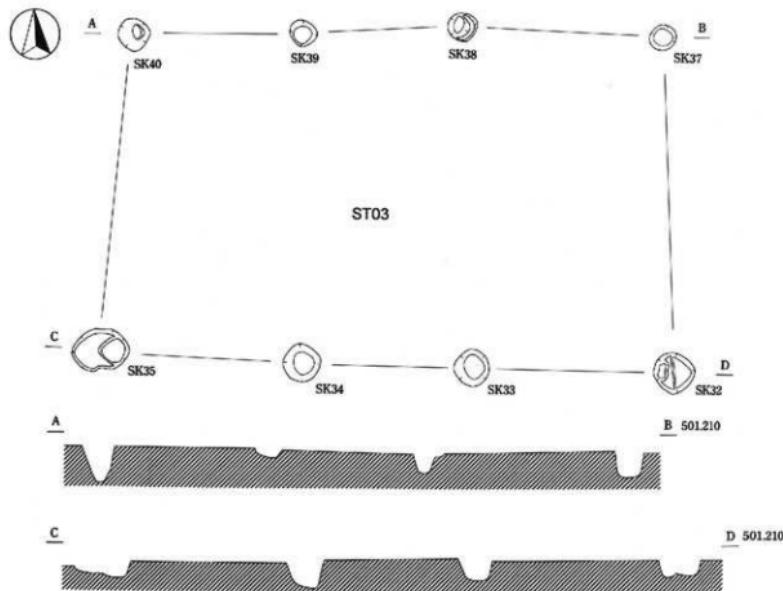
第9図 1号方形周溝遺構



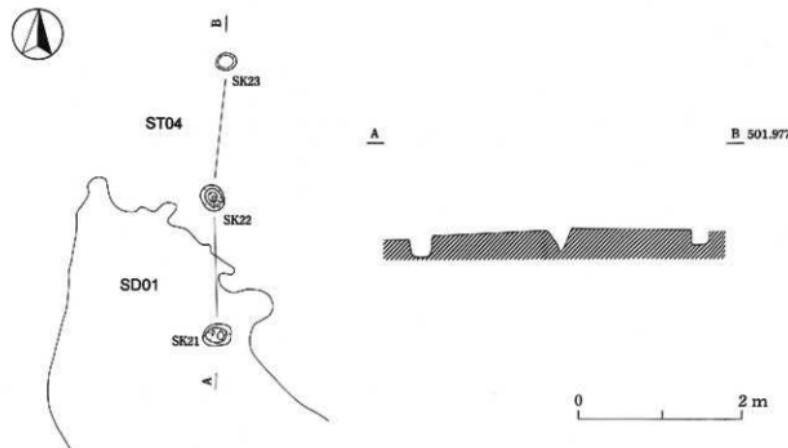
第10図 1号掘立柱建物跡



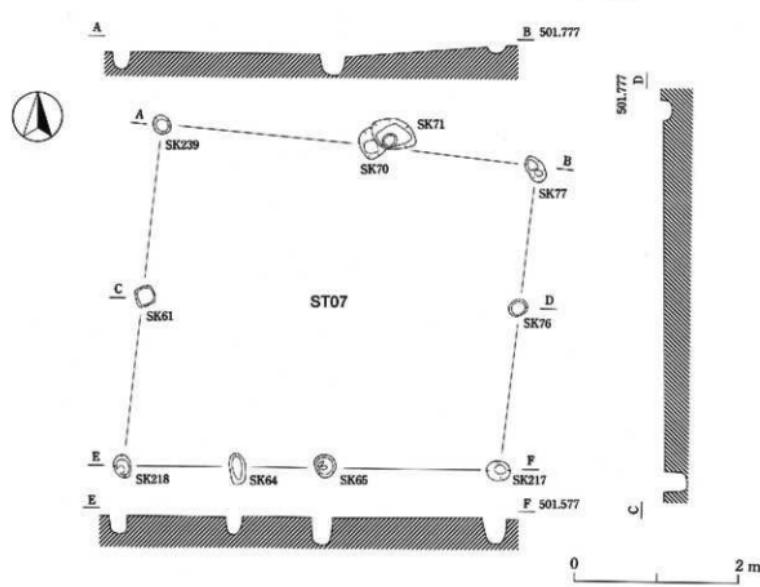
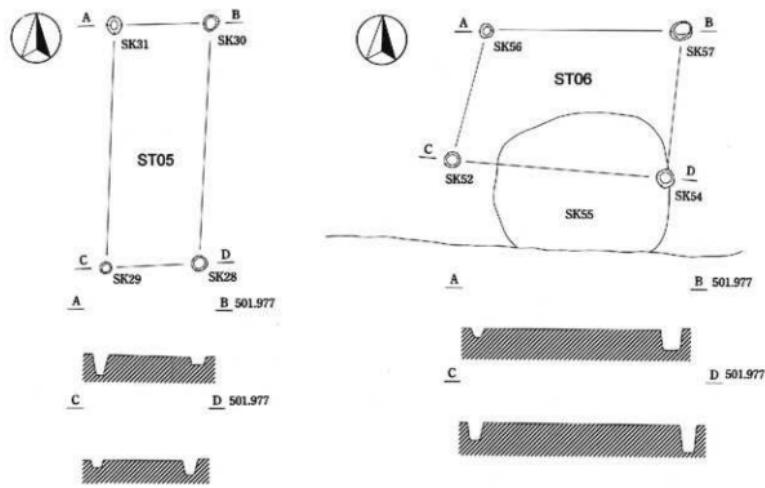
第11図 2号掘立柱建物跡

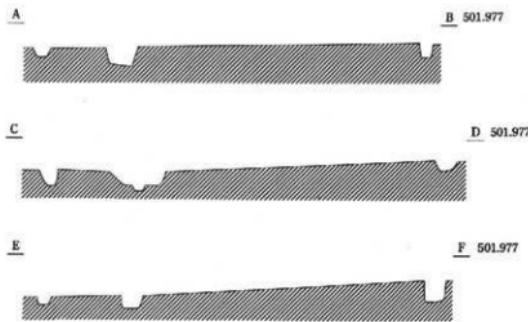
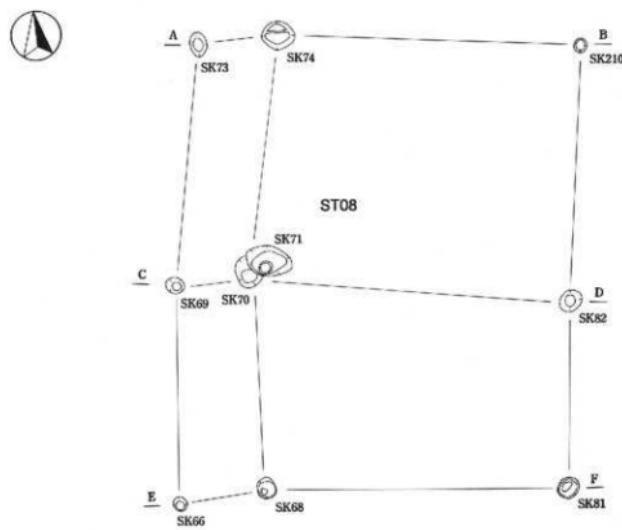


第12図 3号据立柱建物跡



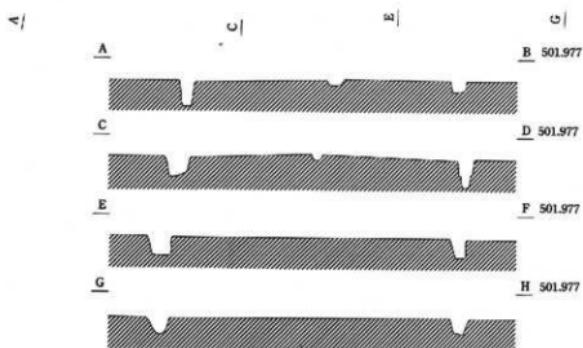
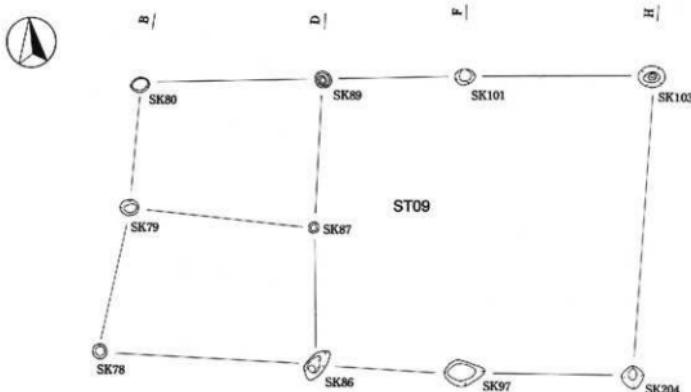
第13図 4号据立柱建物跡



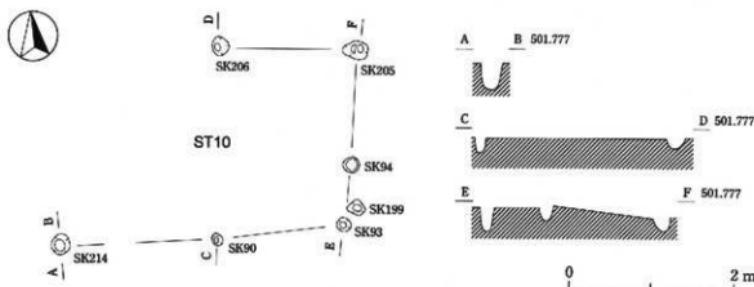


0 2 m

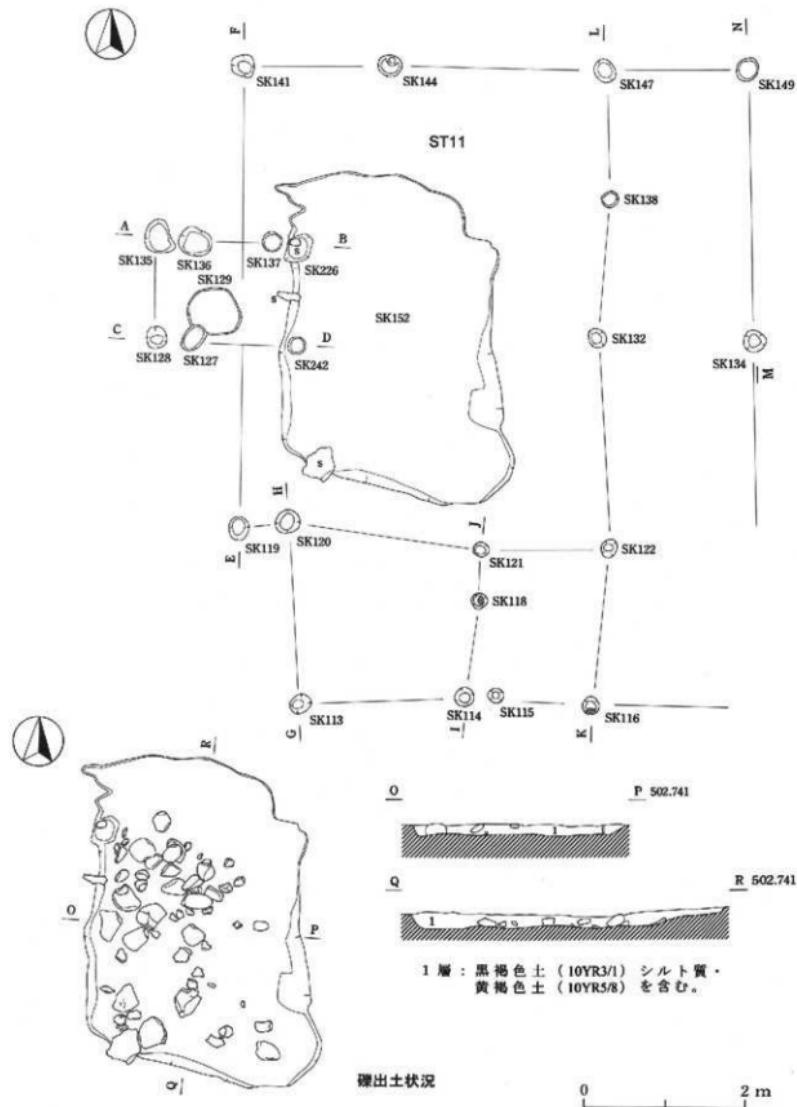
第 17 図 8 号掘立柱建物跡



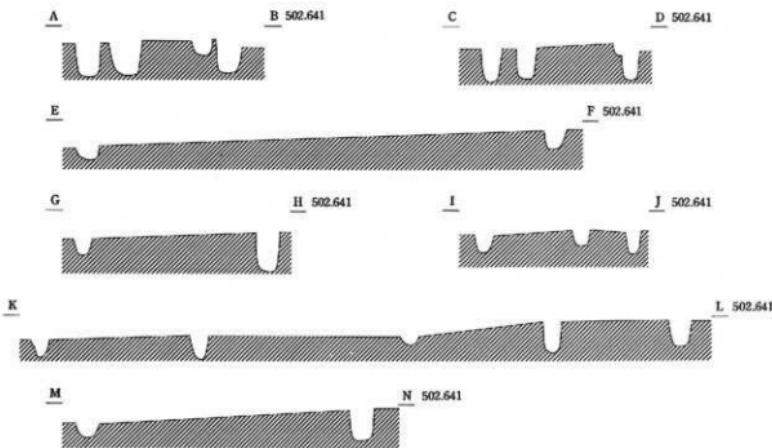
第18図 9号掘立柱建物跡



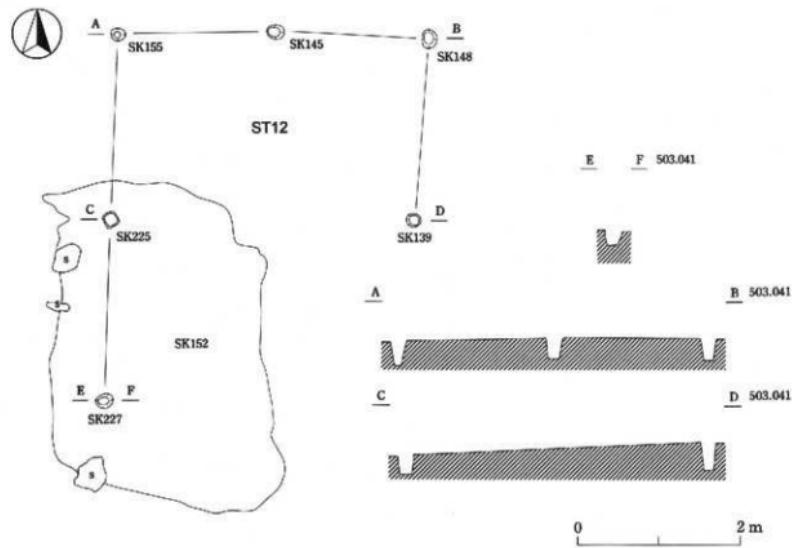
第19図 10号掘立柱建物跡



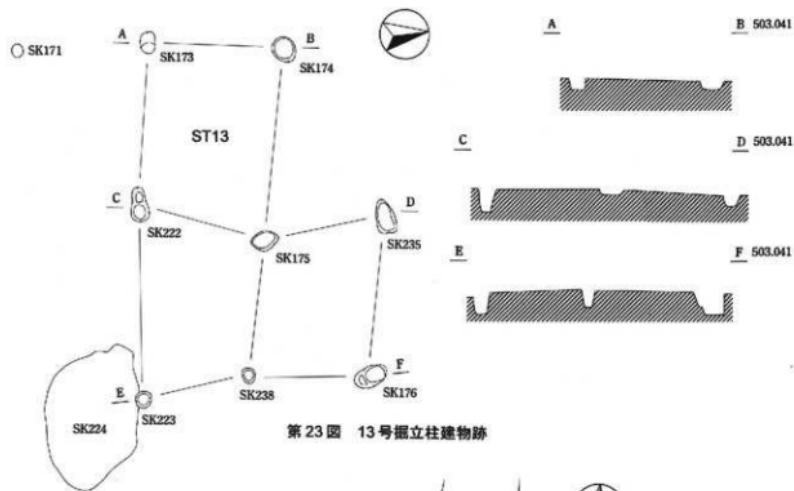
第20図 11号掘立柱建物跡



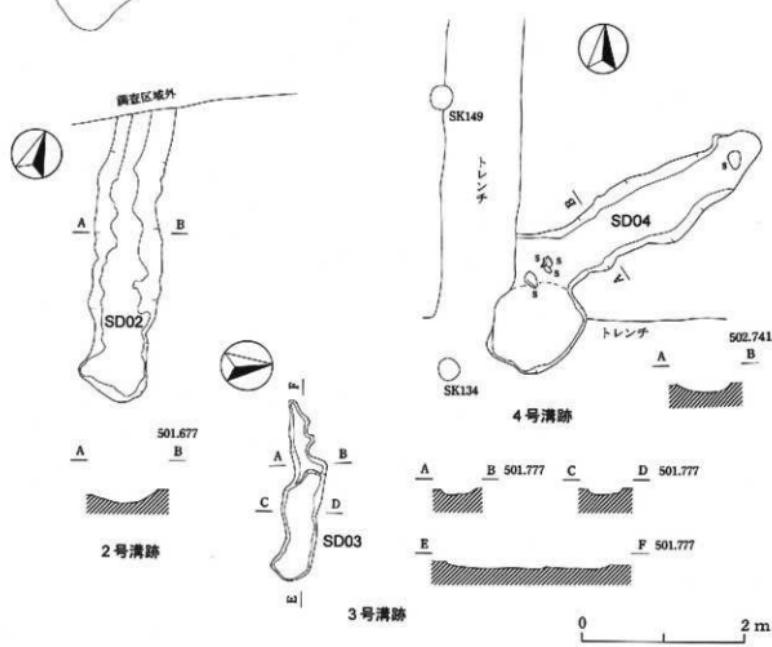
第21図 11号掘立柱建物断面



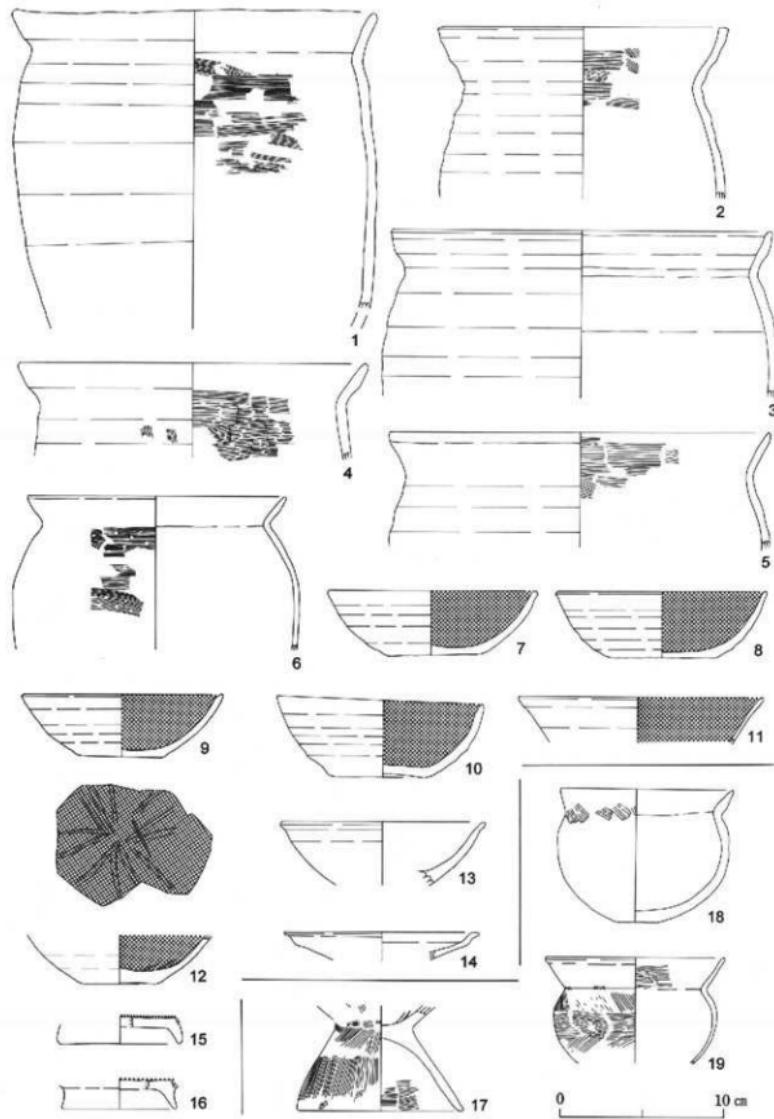
第22図 12号掘立柱建物跡



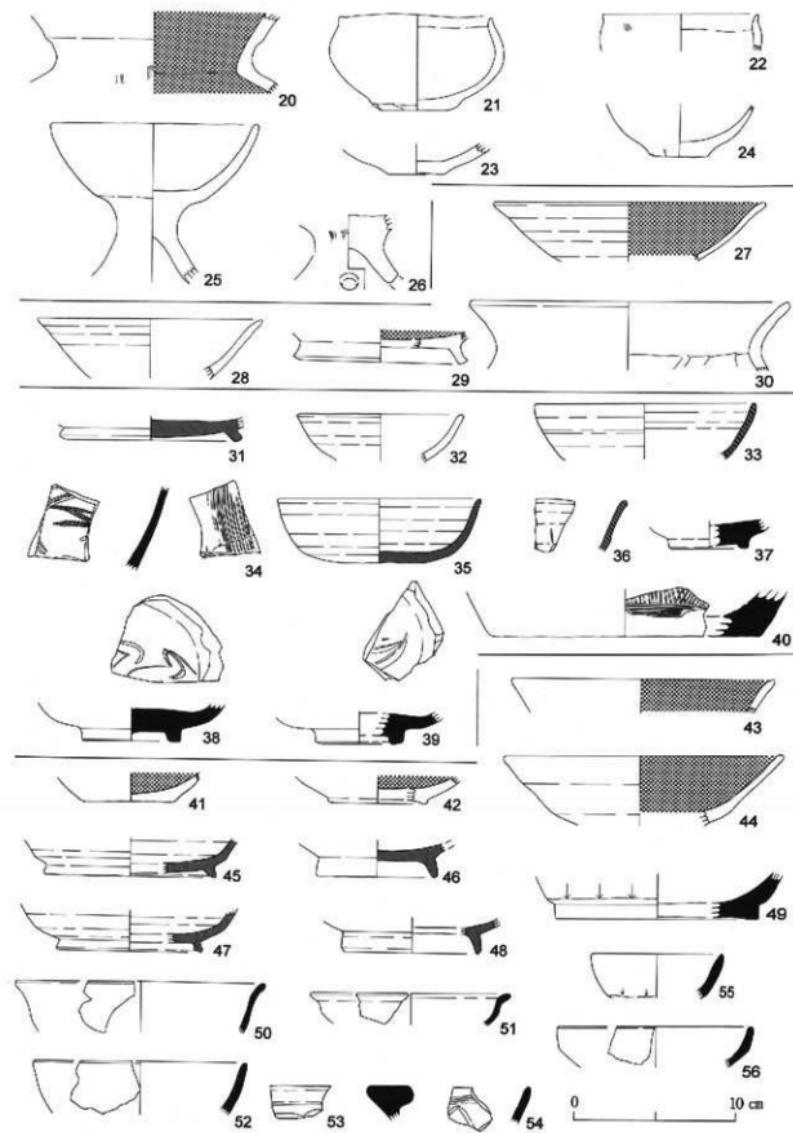
第23図 13号掘立柱建物跡



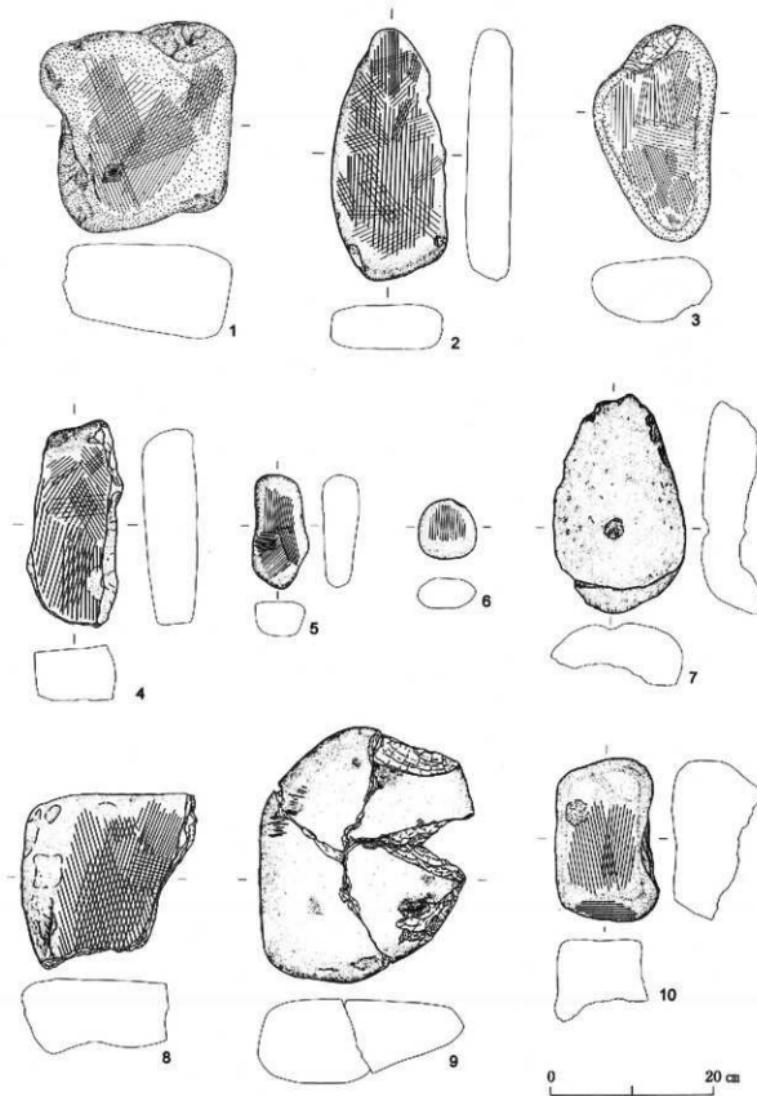
第24図 2・3・4号溝跡



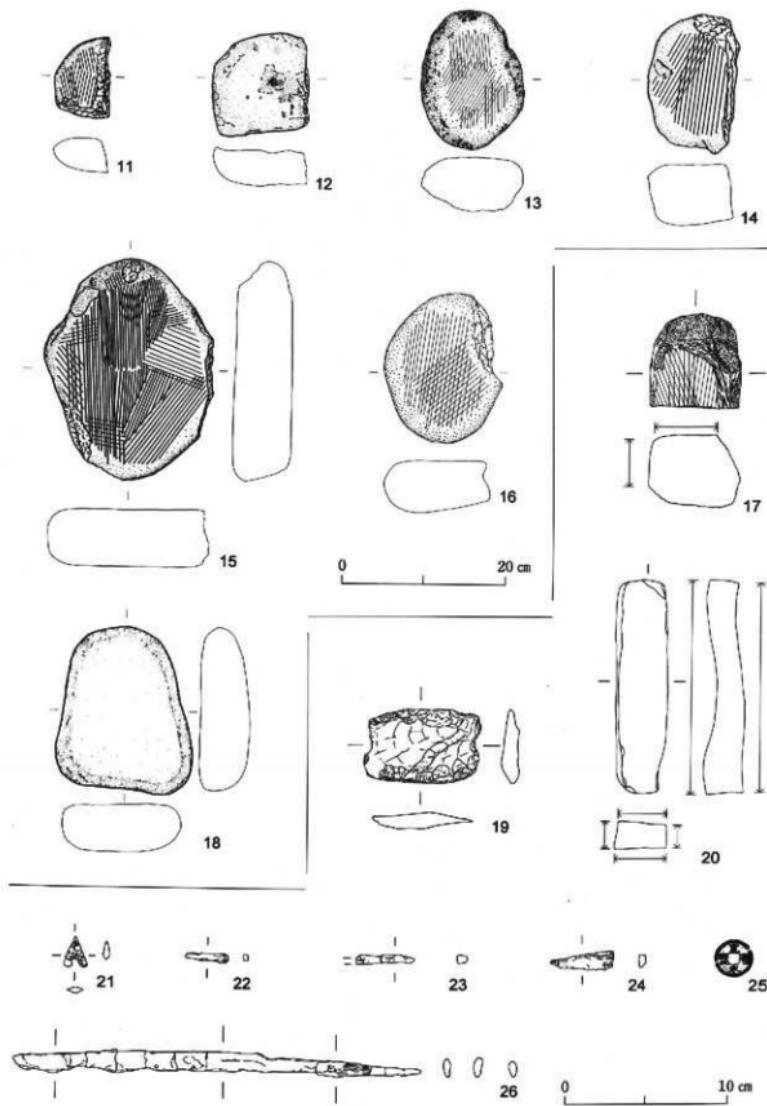
第25図 1号・3号住居跡出土土器



第26図 3号住居跡・溝・土坑・遺構外出土土器



第27図 石 器



第28図 石器・その他

第二節 遺構・遺物観察表

遺構観察表

整穴住居 (S B)

No	時 期	平面形	主軸方向	炉又はカマド	柱穴	その他の屋内施設	出土遺物
1	平安 (9C)	長方形	N-5° -W	カマド(北壁)	(2)	カマド右に土坑	1~16
2	平安 (9C?)	方 形	N-44° -W	不 明		周溝をもつ。	
3	古墳	方 形	N-112° -W	地床炉	4	周溝・排水溝・間仕切り溝をもつ。	17~26

掘立柱建物 (S T)

No	時 期	規 模	主軸方向	柱の数	備 考
1	平安	不 明	N-65° -E	(4)	
2	古墳	3間×	N-79° -E	(8)	
3	平安	1間×3間	N-93° --E	8	
4	古墳	2間×	N-89° -E	3	
5	古墳	1間×1間	N-0°	4	
6	平安?	1間×	N-88° -E	3	
7	平安?	2間×2間	N-93° -E	8	
8	平安?	2間×1間	N-11° -E	9	廻柱を伴う。
9	平安?	2間×3間	N-96° -E	10	
10	平安(終末)	3間×3間	N-93° -E	11	西側に2間×2間の付属施設をもつ。
11	平安(終末)	2間×2間	N-2° -E	5	
12	平安(終末)	2間×2間	N-4° -E	7	総柱建物

溝 (S D)

No	時 期	断面形	備 考	出土遺物
1	平安		皿状の浅い窪地を呈しており、溝の確認をとることができなかった。遺物は土器の他に馬の歯の破片が出土している。	27~29
2	不明	皿 状		30
3	不明	皿 状		
4	不明	皿 状	土坑と切り合っている可能性あり。	

填墓 (S M)

No	時 期	平 面 形	主軸方向	備 考	出土遺物
1	中 世	方 形	N-81° -E	骨片・刀子が拳大の石の間から出土している。	23

土坑(SK)

No	時期	平面形	備考	出土遺物
02	(平安)	長楕円形	骨片を含む。刀子を出土。	
04	(平安)	隅丸長方形	骨片を含む。	
09	(平安)	隅丸長方形		
10	不 明	円 形		31
48	不 明	円 形		32
55	不 明	不整円形	炭化物・焼土を含む。	33・34
152	(中世)	不整長方形	焼骨を含む。	35~40
153	(中世)	不整長方形	炭化物を含む。	
154	(中世)	不整長方形	炭化物を含む。	
162	(中世)	不整長方形	炭化物を含む。	
169	(中世)	不整円形	炭化物を含む。	
170	(中世)	円 形	炭化物を含む。	
172	(中世)	不整円形	炭化物を含む。	
234	(平安)	長楕円形	骨片・炭化物を含む。	

出土土器觀察表

No	出土遺構名	A器種 B器形 C文様 Dその他	a 色調 b 胎土 c 焼成	残率
1	S B 0 1	A壺 D外面にロクロ調整を施す。	a にぶい橙 b 茶色粒子・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/2(口縁)
2	S B 0 1	A壺 D外面にロクロ調整を施す。	a にぶい橙 b 茶色粒子・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/8(口縁)
3	S B 0 1	A壺 D外面にロクロ調整を施す。	a 橙 b 茶色粒子・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/6(口縁)
4	S B 0 1	A壺	a にぶい橙 b 茶色粒子・砂粒を含む。 c 良好	1/8(口縁)
5	S B 0 1	A壺	a 淡橙 b 茶色粒子・砂粒を含む。 c 良好	1/4(口縁)
6	S B 0 1	A壺	a 橙 b 茶色粒子・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/4(胸部)
7	S B 0 1	A壺 D底部回転糸切り。内面に黒色処理を施す。	a にぶい橙 b 茶色粒子・白雲母・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	完形
8	S B 0 1	A壺 D底部回転糸切り。内面に黒色処理を施す。	a にぶい橙 b 茶色粒子・白雲母・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/2
9	S B 0 1	A壺 D内面に黒色処理を施す。	a 橙 b 茶色粒子・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	3/4
10	S B 0 1	A壺 D底部回転糸切り。内面に黒色処理を施す。	a 淡赤橙 b 茶色粒子・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	2/3
11	S B 0 1	A壺 D内面に黒色処理を施す。	a 褐灰 b 黒雲母・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/5(口縁)

12	S B 0 1	A坏 D底部回転糸切り。内面に黒色処理を施す。暗文。	a にぶい橙 b 茶色粒子・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	底部
13	S B 0 1	A坏	a にぶい橙 b 黑雲母・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/4(口縁)
14	S B 0 1	A高坏	a 橙 b 砂粒を含む。 c 良好	1/6(坏部)
15	S B 0 1	A碗? D底部回転糸切り。内面に黒色処理を施す。	a にぶい橙 b 黑雲母・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/4(底部)
16	S B 0 1	A碗? D内面に黒色処理を施す。	a 橙 b 黑雲母・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/5(底部)
17	S B 0 3	A台付壺 D外面ハケ調整。	a 赤褐 b 砂粒を含む。 c 良好	3/4(台部)
18	S B 0 3	A壺 D器面荒れている。	a 赤褐 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	ほぼ完形
19	S B 0 3	A壺 D外面ハケ調整。	a 橙 b 茶色粒子・砂粒を含む。 c 良好	1/2(口縁)
20	S B 0 3	A壺 D内面に黒色処理を施す。	a 明赤褐 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/6(頸部)
21	S B 0 3	A坏 D器面荒れしており調整等不明。	a 橙 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	ほぼ完形
22	S B 0 3	A坏	a 明赤褐 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/3(口縁)
23	S B 0 3	A壺	a 明赤褐 b 茶色粒子・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	底部
24	S B 0 3	A鉢?	a 橙 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	底部完形
25	S B 0 3	A高坏 D器面荒れしており調整等不明。	a 橙 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	坏部完形
26	S B 0 3	A高坏 D脚部に円形透窓を4ヶ所持つ。	a 明赤褐 b 黑雲母・砂粒を含む。 c 良好	接合部
27	S D 0 1	A坏 D内面に黒色処理を施す。	a 浅黄橙 b 茶色粒子・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/8(口縁)
28	S D 0 1	A坏	a 橙 b 茶色粒子・白雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/5(口縁)
29	S D 0 1	A坏 D内面に黒色処理を施す。	a 橙 b 砂粒を含む。 c 良好	1/4(底部)
30	S D 0 2	A壺 D口縁部に面取りを施す。	a にぶい赤褐 b 白雲母・黒雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/6(口縁)
31	S K 1 0	A坏(須恵器) D底部回転ヘラ切り。付高台。	a 灰白 b 砂粒を含む。 c 良好	1/4(底部)
32	S K 4 8	A坏	a 明赤褐 b 茶色粒子・雲母・砂粒を含む。 c 良好	1/4(口縁)
33	S K 5 5	A碗(灰釉)	a 灰白 c 良好	1/6(脚部)
34	S K 5 5	A碗 D同安窯青磁碗(12C後)	a 灰白 c 良好	胴部

35	S K 1 5 2	A 坏 (須恵器) D 底部回転糸切り。	a 灰 b 砂粒を含む。c 良好	1/3
36	S K 1 5 2	A 風 D 山茶碗・尾張系 (12C)	a 灰白 c 良好	1/10(口縁)
37	S K 1 5 2	A 風 (青磁) D 龍泉窯青磁碗 (13C~)	a 灰白 c 良好	1/5(底部)
38	S K 1 5 2	A 風 (青磁) D 龍泉窯青磁碗 (12C 後)・画花文の青磁碗	a 灰白 c 良好	1/4(底部)
39	S K 1 5 2	A 風 (青磁) D 龍泉窯青磁碗 (12C 後)・画花文の青磁碗	a 灰白 c 良好	1/4(底部)
40	S K 1 5 2	A すり鉢 D 近世 (18C~)	a にぶい橙 c 良好	1/6(底部)
41		A 坏 D 底部回転糸切り。内面に黒色処理を施す。胎土緻密である。	a にぶい橙 b 白雲母・砂粒を含む。c 良好	2/3(底部)
42		A 坏 D 内面に黒色処理を施す。	a 橙 b 茶色粒子・砂粒を含む。c 良好	1/3(底部)
43		A 坏 D 内面に黒色処理を施す。	a 黒褐 b 白雲母・砂粒を含む。c 良好	1/8(口縁)
44		A 坏 D 内面に黒色処理を施す。	a にぶい橙 b 砂粒を含む。c 良好	1/4(胴部)
45		A 坏 (須恵器) D 底部回転ヘラケズリ。	a 灰 b 白雲母・砂粒を含む。c 良好	1/4(底部)
46		A 風 (灰釉)	a 灰白 c 良好	底部
47		A 坏 (須恵器)	a 灰 b 砂粒を含む。c 良好	1/5(底部)
48		A 風 (灰釉)	a 灰 c 良好	1/4(底部)
49		A 鉢? D 漬戸・美濃 (近世)	a 灰白 c 良好	1/4(底部)
50		A 風 D 龍泉窯玉緑碗 (14C 後~15C 前)	a 灰白	破片
51		A 盆 D 輪はげ皿。瀬戸・美濃 (17C~)	a 灰白	破片
52		A 風 D 古瀬戸 (15C~16C)	a 浅黄橙	破片
53		A 不明 D 青磁 (時期不明)	a 灰白	破片
54		A 風 D 龍泉窯青磁碗 (13C)・蓮弁文	a 灰白	破片
55		A 風皿 D 古瀬戸 (18C 中)	a 灰白	破片
56		A 盆 D 漬戸・美濃 (18C)	a 灰白	破片
57	(図示なし。)	A 盆 D 青磁皿 (13C~)	a 灰白	破片

出土石器観察表

No	出土遺構	名 称	時 期	石 材	特 微
1	S B 0 3	台 石・凹 石		安 山 岩	
2	S B 0 3	砥 石		砂 岩	
3	S B 0 3	台 石		安 山 岩	
4	S B 0 3	砥 石		安 山 岩	
5	S B 0 3	磨 石		安 山 岩	
6	S D 0 2	磨 石		安 山 岩	
7	S D 0 4	凹 石		安 山 岩	
8	S K 1 2 7	砥 石		安 山 岩	一部にススが付着している。
9	S K 1 5 2	台 石		安 山 岩	刃物によると思われる傷をもつ。
10	S K 1 5 2	砥 石?		安 山 岩	
11	S K 1'5 2	磨 石?		安 山 岩	
12	S K 1 5 2	凹 石		凝 灰 岩	
13	S K 1 5 2	台石・砥石		頁 岩	
14	S K 1 5 2	台石・砥石		安 山 岩	一部にススが付着している。
15	S K 1 5 2	台石・砥石		安 山 岩	一部にススが付着している。
16	S K 1 5 2	台石・砥石		安 山 岩	一部にススが付着している。
17	S K 5 3	砥 石		砂 岩	
18	S K 1 7 2	台 石		安 山 岩	
19	S B 0 3	石 鏡		頁 岩	敲打痕をもつ。
20	グリッド	砥 石		凝 灰 岩	
21	S D 0 1	打製石鏡	繩文時代	チャート	

その他観察表

No	出土遺構	名 称	時 期	材 質	特 微
22	S B 0 3	刀 子	古墳時代	鉄	
23	S M 0 1	釘?	中世	鉄	断面形が円形を呈する。
24	S K 0 2	刀 子	平安時代	鉄	木質部が残る。
25		錢 貨	江戸時代	青 銅	「寛永通宝」
26	S B 0 1	刀 子	平安時代	鉄	柄に木質部が残る。

第三節　まとめ

①古墳時代中期

SB03のみが確認されただけである。他の遺構は確認できず、一軒だけの堅穴住居である。遺物には土器・石器と刀子の破片と思われる金属片が出土している。土器は古墳時代前期を中心に出土する台付甕も確認されている。小型甕には器厚が薄くハケ調整を施したもの（布留系）もある。高坏も前期の形態を残している。しかし、碗形の鉢は古墳時代中期に出現するものと思われる。石器は磨痕の残る台石や砥石・凹石が出土している。これらの遺構及び出土遺物から古墳時代中期初頭に所属する堅穴住居と思われる。

②平安時代

SB01出土の遺物が中心となる。土器は北信型のロクロ甕と土師器の坏をセットとしてもつ。土師器の坏の形態から9世紀後半頃の遺構と思われる。また、床面から刀子が出土している。ST03・06・07・08・09とSK02・04・09・234もほぼ同時期の遺構と思われる。土坑（SK02・04・09・234）からは人骨が出土しており土坑墓と思われる。上田市内における奈良・平安時代の墳墓は、上田原遺跡で確認されている。上田原遺跡の事例は①円形の土坑の中位に頭骨のみが埋葬され、その横に土師器の坏が正常位で埋置されていたもの②木製の箱状容器に骨片と土師器の坏が埋納されていたと思われるものが確認されている。遺構の所属時期は平安時代（9C）と思われる。東日本の奈良・平安時代においては「墓」の存在が必ずしも一般的なものではなく、庶民は遺体を遺棄していたと考えられている。「富豪層」などの有力な家族については火葬や土葬を行っていたと考えられている（第五回 東日本埋蔵文化財研究会「東日本における奈良・平安時代の墓制」1995）という。当該遺跡では、堅穴住居と掘立柱建物が併設されており、少し距離をおいて墓域が形成されている村落景観が想定される。これらのことからSB01を営んでいた集団は自立的な農民層と考えることができる。また、隣接する古城遺跡は出土遺物から9世紀後半と11世紀前半を中心とした遺跡であることが推定される。この集落についても上沖遺跡と同様のことが言えそうである。このことから、染屋台南部の平安時代の集落は台地端部に堅穴住居と掘立柱建物をセットにした2～3軒の小集落が点在していたと思われる。

③中世

ST10の内部にSK152を伴う遺構を中心としてSK153・154・162・172などの皿状の土坑とST12が付属している一つのまとまりを比定する。周囲には他の遺構が確認できないことから、このまとまりは屋敷地と考えることができ。SK152及びその周辺出土の陶磁器から12世紀後半を中心とした遺構と思われる。SK152は子供の頭大の石が投げ込まれており、そのうち幾つかには磨痕や焼けた跡があった。骨片も確認されており、何らかの魔除行為を行った可能性がある。皿状土坑群には、いずれもその覆土中に炭化物が含まれていた。これらの遺構は、第30図による8期に属すると思われる。当該期は土器からみると古代の食器構成から中世のものに変わった時期になると思われる。上小地方の中世前半の遺跡は、浦田B遺跡（上田市）・市の町遺跡（丸子町）・古屋敷遺跡（東部町）・太平寺遺跡（東部町）が確認されている。浦田B遺跡は13世紀から14世紀にかけての屋敷地と思われる。市の町遺跡では当該遺跡とほぼ同じ時期と思われる掘立柱建物と堅穴住居が検出されている。古屋敷遺跡・太平寺遺跡は遺構がはっきりしていないが遺物が出土している。

SM01は、「センカ塚」として池元に伝わっていたものと思われる。『復元「信濃國繪図」第一巻小郡郡篇』（1994）によると「村の北の方大澤にあり。高1丈、周囲十間許、塚上ヒモロの老樹あり、周五尺許。某の墳墓なるか不詳。」と記載されている。しかし、調査時にはすでにマウンドが削平されており出土遺物もほとんど無く、所属時期を確定することはできなかった。

付論一上小地方の奈良・平安時代の土器について（1）

上小地方の奈良時代から平安時代の土器様相については全県的な動向と大きな相違は無いものと思われる。しかし、若干の地域差は生じていると思われ、信濃国分寺が設置された地域としての独自性と時間軸の構築が当該期の歴史認識の第一歩であると考えたい。上小地方の奈良時代から平安時代の土器様相については、これを論考したものは少なく、次の3論考のみである。まず、その内容を確認する事とする。

<長野県考古学会誌55・56号 1987年>

シンポジウム『信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相』（長野県考古学会誌55・56号1987）において、小林真寿氏により『上小地方における様相』として上小地方のまとめがなされた。本論では、①生産遺跡（窯跡）と②消費地としての国分寺・集落に区分し土器について言及している。

①窯跡については、山の神3号窯跡出土土器（切り離し技法はヘラ。坏は手持ちヘラケズリ。高台付坏は回転ヘラケズリ。）は8世紀中葉を下らないとした。原山窯跡出土土器（切り離し技法はヘラと糸切りが共存。その後、回転ヘラケズリなし手持ちヘラケズリ。）は8世紀後半から9世紀初頭と推定した。

②集落跡などについては、国分僧寺・尼寺出土土器（ヘラ切り・ヘラ調整）・明神前遺跡II地点出土土器（カマドの芯材として国分寺創建時の瓦を使用。回転ヘラケズリの須恵器・手持ちヘラケズリの土師器坏。）・社軍寺遺跡SB19出土土器（須恵器坏は底部ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリ。）・片羽遺跡SB03出土土器（須恵器坏は底部に糸切り痕を残す。ヘラ切りの後に手持ちヘラケズリ。土師器壺は武藏型。）・陣馬遺跡SB07出土土器（須恵器坏は底部糸切り。高台付坏は底部回転ヘラケズリ。身は深い。土師器坏は内黒で底部とその周辺に手持ちヘラケズリを加える。土師器壺は武藏型。）・市の町遺跡15号土坑出土土器（須恵器坏は底部に回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ。）・上屋久保遺跡SB01先行土坑出土土器（須恵器坏はヘラ切り・糸切りの後回転ヘラケズリ。土師器壺は内黒で底部手持ちヘラケズリ。土師器壺は武藏型。）などを検討した。

これらの検討により、古墳時代末から平安時代初頭を5期に細分した。I期は、須恵器坏蓋にかえりを持つものと持たないものが共存するが上小地方では皆無であった。II期は、須恵器坏蓋のかえりが完全に消失する。依田古窯跡群が操業を開始するまでの期間（国府・国分寺の造営以前）とした。III期は、国府・国分寺の造営に伴い、依田古窯跡群が操業を開始してからロクロ成形の土師器が出現するまでとした。ヘラ切り技法が中心となる。IV期は、ロクロ成形の土師器が出現。須恵器坏は糸切りのものとヘラ切りのものが共存する。土師器壺は武藏型である。住居跡出土の土器セットに占める須恵器の比率は非常に高くなる。V期は、須恵器坏のヘラ切りが消滅し、糸切り未調整のもののみとなる。住居跡出土の土器セットに占める須恵器の比率は非常に高い。また、5時期を実年代に比定するに当たり国分寺創建を741年より程遠くない時期と仮定した。これらのことから、I期を7世紀末から8世紀初頭、II期を8世紀前半の8世紀第1・2四半期、III期を8世紀第3四半期、IV期を天平勝宝年間（749～756年）を遡らない8世紀第4四半期、V期を9世紀第1四半期に比定した。

<外城遺跡・有津倉遺跡・陣馬遺跡 1987年>

小林真寿氏は、報告書の中で陣馬遺跡の住居跡出土の一括土器を中心として、「東部町南東地域土器編年図」を作成し、考察を行っている。小林氏は、上小地方においては年代を与える基準となり得る資料が無いため、大まかな年代を与える他ない状態が続いていると述べている。その状態から脱却するために、東部町南東地域を対象として、平安時代とその前後の時代の一部について土器編年を試みている。編年は、若宮遺跡（佐久市）曾根城遺跡（小諸市）など他地域の編年との対比の中で行っている。時期区分は、I～VII期に細分している。I期は8世紀から9世紀初頭に比定している。II期では、須恵器坏蓋は口縁部が「く」の字に外反するものが出現す

る。土師器甕は武藏型ないしそれに近い甕の口縁部形態が「く」の字状を呈する。9世紀前期に比定している。Ⅲ期は、土師器甕は武藏型の甕の口縁部形態が「く」と「コ」の中間形態をとる。9世紀中頃に比定している。Ⅳ期は、灰釉陶器の影響を受けたと思われる土師器の内黒高台付の皿が出現する。土師器甕は武藏型の甕の口縁部形態がより「コ」の字に近くなる。9世紀中頃から後半に比定している。Ⅴ期は、須恵器が無高台の甕と甕のみとなる。坏蓋と高台付坏は認められなくなる。9世紀後半から10世紀前半に比定している。Ⅵ期は、灰釉陶器は猿投窯編年0～53期のものが共伴する。土師器高台付坏が増加する。黒色処理するものは1,000年以降と考える。10世紀中頃から11世紀前半に比定している。Ⅶ期は、中世的な土器である。甕に代わり羽釜が主流となる。什器の大半が小皿で占められる。足高高台付坏が出現する。灰釉陶器は消滅する。12世紀中頃に比定している。また、Ⅷ期とⅨ期の間には1期ないし2期が介在すると考えている。

<上田小県誌歴史編上(1)考古 1995年>

『第六編奈良・平安時代』の「第六章奈良・平安時代の生活と住居」において、林和男氏によって奈良・平安時代の土器の変遷感がまとめられている。本論では、奈良時代を前期・後期の二時期に、平安時代を前期・中期・後期の三時期に区分している。その大まかな変遷内容を、①奈良時代の土器は、画一化された律令式土器様式と呼ばれている。②平安時代になると須恵器の地方窯が操業するようになるが、9世紀後半になると衰退し、土師器や灰釉陶器の比率が高まってゆく。③須恵器の什器は10世紀代には坏のみとなって高台の付くものではなくなり、やがて生産されなくなる。また、甕などはわずかに生産されるが、11世紀には消滅する。④土師器の什器は、9世紀後半以降には再び増加していくが、粗雑なものになる。⑤土師器甕は、平安時代後半には羽釜へと変化すると捉えている。

各時期の内容については、①奈良時代前期は、坏・高坏が盛行する。甕・皿・盤・鉢・有蓋壺などが出現する。須恵器坏は、へら切り・底部を丸味を持たせて削る。土師器坏は、内面黒色処理を施したものが多い。土師器甕は胴が長い鳥帽子形となり、頸部から胴部にかけて横方向に斜めに削って調整する手法が特徴となる。②奈良時代後期は、什器に占める須恵器の比率が最大となる。須恵器坏は底部が平底となり、切り離し手法に糸切り技法が見られるようになる。土師器坏は大型のものが多い。③平安時代前期は、9世紀初頭には須恵器の占める比率が高くなる。9世紀半ばになると再び黒色土器の増加がみられ、灰釉陶器の流入も盛んになる。須恵器の什器は衰退していく。須恵器坏はへら切りから糸切り底に変わってゆく。④平安時代中期は、灰釉陶器が多く用いられるようになる。什器は黒色土器が主体となる。土師器の甕では羽釜の導入が始まる。⑤土師器の什器は、黒色土器が消滅しロクロ調整のままのものとなり、小型化が進む。足高高台坏が出現する。煮沸具は甕から羽釜が主体となる。

このように、上小地方の奈良・平安時代の土器は変遷するものと考えられている。それぞれの土器の変遷感を対応させると表1のようになると思われる。現在、これらの論考が記されたころよりも上小地方では良好な資料が増加しており、あらためて奈良から平安時代までの土器変遷を上田盆地を中心にして追うことが必要となっている。しかし、依然として時期を確定できる資料に乏しいことも事実である。

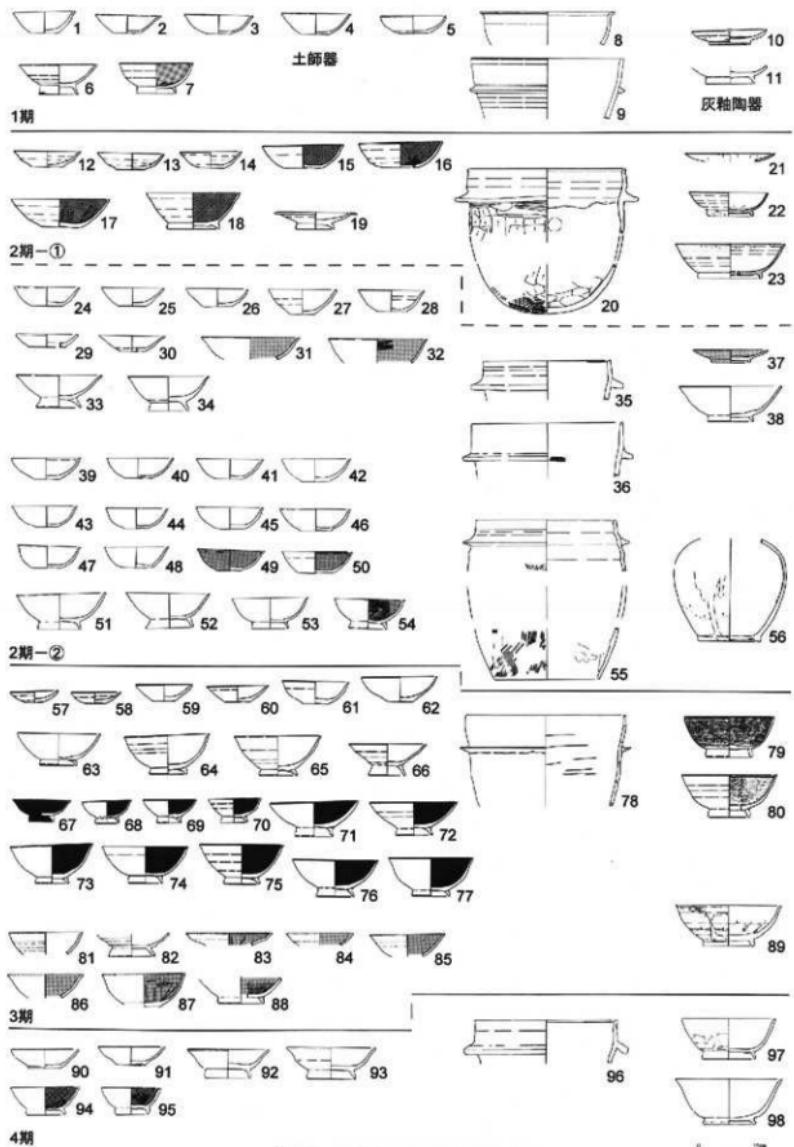
さて、本稿では奈良・平安時代におけるすべての土器について検討する余裕も力量もないでの、平安時代の後半における土器の変遷を①他地域の編年との比較②須恵器・灰釉陶器の変遷感を中心として検討を加えてみた。使用した資料は、①堅穴住居跡一括出土或いはカマド跡出土と思われる土器群②土師器の坏・羽釜と灰釉陶器が共伴出土している資料を中心として検討した。但し、③全体の器形のわかるものを中心とし、破片資料は原則として除いた。これらの検討から、上小地方の平安時代後半の食器の変遷は第29・30図のようになった。今までのところ平安時代後半は1～8期に分けることが可能であると思われる。この時期は、食器から須恵器が姿を消した段階以降と言えることができる。1～6期までは土師器・黒色土器A・Bと灰釉陶器で構成されている。

8期には土師質土器と陶磁器を中心とした食器構成になると思われる。いずれの時期も、土師器の环A・碗は灰釉陶器に影響された器形の変化をしているようである。煮沸具の羽釜には大きな形態の変化はみられない。また、大きな画期が5期と8期にみられる。5期では、皿Aなどの小型の食器や盤Bが目立ち始める。环Aは直線的な体部を持つようになる。8期では土師質土器と陶磁器を中心とした中世的な食器構成となる。しかし、7・8期の資料は少なく山茶碗・手づくね土師器皿などの食器構成についても不明な点が多い。今後の資料の増加が待たれる。

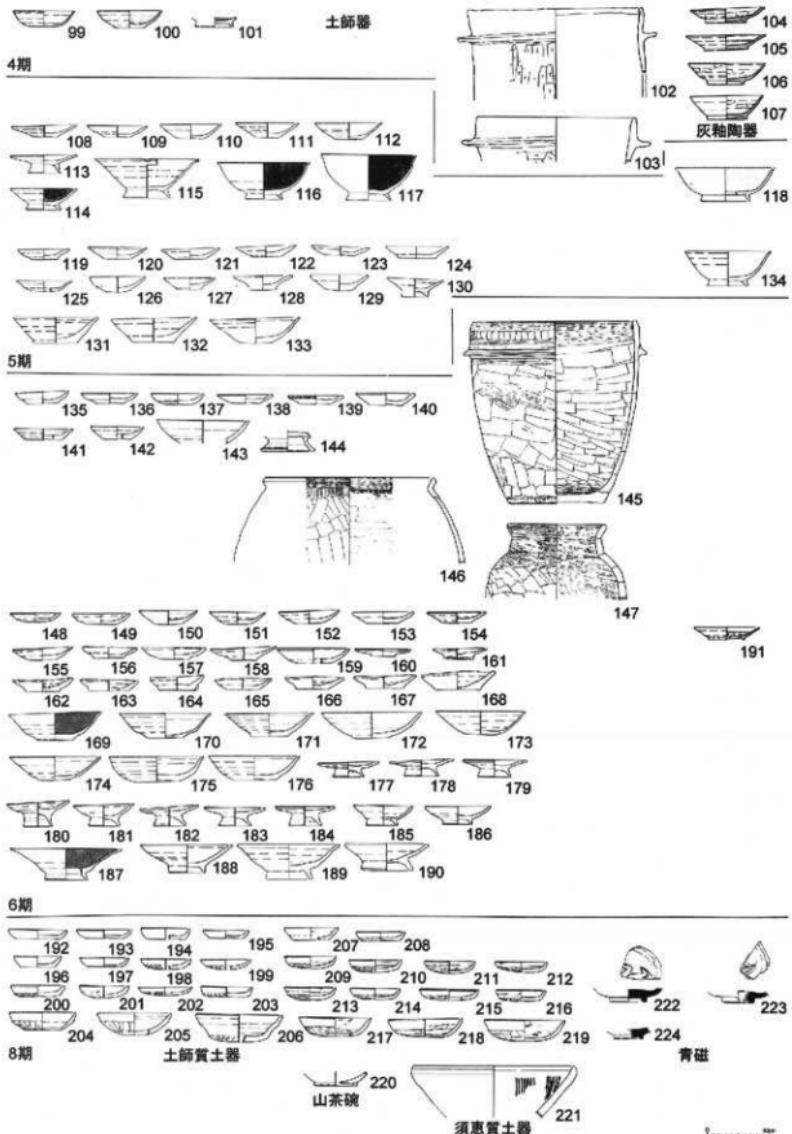
次に各段階の様相を簡単にまとめておきたい。なお、使用する土器の分類・用語は「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—総論編一」に準ることとする。1期：使用している資料は信濃国分寺尼寺跡の西側の跡地から検出された堅穴住居の土器であるため、938年に信濃国分寺が焼失したとの説を重視するならば2期（10世紀中）に近い資料となろう。环A・碗は底部から丸味をもって立ち上がる。2期：1期とほとんど変わらない。碗はその高台がハの字状に開くようになる。灰釉陶器と碗の変化からさらに2時期に分けることも考えられる。3期：环A・碗の身は浅めのものと深めのものにわかれれる。4期：环A・碗は、口径に比べて底径が大きなものが出現する。环Aは底部から直線的に開くようになる。5期：皿Aが見られるようになる。环Aは、口縁が逆ハの字状に開くようになる。6期：盤Bが盛んに作られる。中世的な皿Aが作られるようになる。7期：上小地方では、はっきりと確認できではない。今後の調査に期待したい。8期：12世紀後半以降とした。古屋敷遺跡・太平寺遺跡・上沖遺跡SK152・市の町遺跡より出土した遺物を比定している。土師質土器と須恵質のものと青磁などの磁器がある。なお、7・8期は今後の良好な資料の増加によっては2～3期に細分される可能性がある。

＜参考・引用文献＞

- 上田市教育委員会 「史跡信濃国分寺跡」1989
上田市教育委員会 「神林遺跡・下郷古墳群」1992
上田市教育委員会 「琵琶塚Ⅱ」1989
上田市教育委員会 「高田」1991
上田市教育委員会 「琵琶塚」1987
上田市教育委員会 「上田原遺跡」1996
上田小県誌刊行会 「上田小県誌歴史編上（1）考古」1995
国立歴史民俗博物館 「国立歴史民俗博物館研究報告第71集」1987
古代の土器研究会 「古代の土器研究—律令の土器様式の西東3…」1994
東國土器研究会 「東国土器研究第1号特集—東日本における中世土器研究の現状—」1988
東部町誌刊行会 「東部町誌歴史編上」
東部町教育委員会 「不動坂遺跡群・古屋敷遺跡群」1986
東部町教育委員会 「外城・有津倉・陣馬遺跡」1987
長野県考古学会 「長野県考古学会誌55・56号」1987
御長野県埋蔵文化財センター 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」1990
御長野県埋蔵文化財センター 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2」1998
ニュー・サイエンス社 「考古学ジャーナルNo.211越州窯青磁と平安時代の綠釉・灰釉陶器」1982
九子町教育委員会 「市の町・塩川条里的遺構遺跡」1985
雄山閣出版㈱ 「須恵器集成図録第3巻東日本編」1995



第29図 平安時代後半土器変遷図(1)



	8世紀 710	9世紀 794	10世紀 938	11世紀	12世紀 1192	
年表	平城遷都	国分寺建立	平安遷都	国分寺焼失		鎌倉幕府
上田小県誌	前期		前期		中期	
	後期				後期	
陣場遺跡	I		V			
	II		VI		VII	
長野県考古学会誌	III		IV			
	IV		V			

表1 編年比較表

	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀
中央道・総論編	5 6 7 8	9 10 11 12	13 14 15	
本論		1 2 3	4 5 6	7 8 9

表2 上小地方の平安時代後半の土器編年対応表

1期	「信濃国分寺跡」SB02(1~11)
2期	「国分寺周辺遺跡群」SB412(12~28)・「神林遺跡」SB19(24~38)・「高田遺跡」SB39(39~56)
3期	「琵琶塚遺跡」SB25(57~80)・「信濃国分寺跡」SB01(81~89)
4期	「神林遺跡」SB28(90~98)・「国分寺周辺遺跡群」SB511(99~107)
5期	「琵琶塚遺跡」SB01(108~118)・「上田原遺跡」SB01(119~134)
6期	「陣場遺跡」SB01(135~147)・「国分寺周辺遺跡群」SK621(148~191)
8期	「古屋敷遺跡群」(192~206・221)・「市の町遺跡」(207・208・220)・ 「太平寺遺跡」(209~219)・「上沖遺跡」(222・223・224)

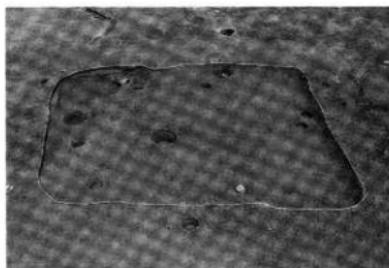
表3 編年表土器対応表



上冲遺跡航空写真



ST10航空写真



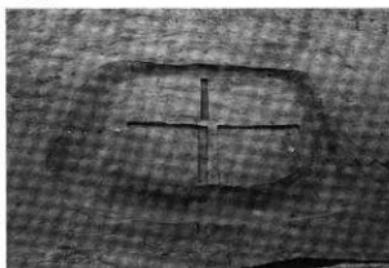
SB01



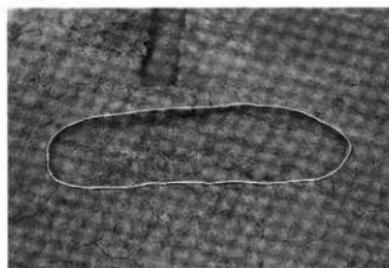
SB04



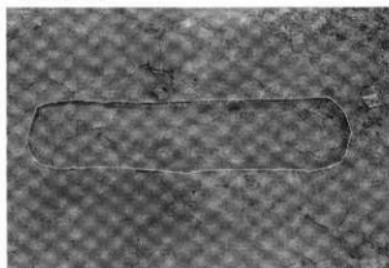
SM01



SM01(完掘)



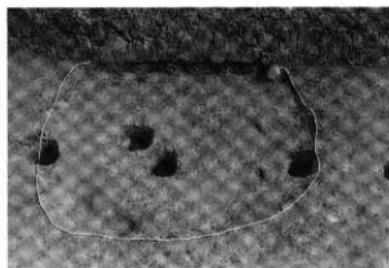
SK02



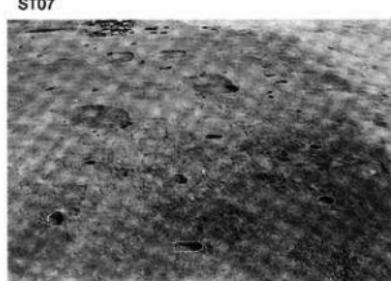
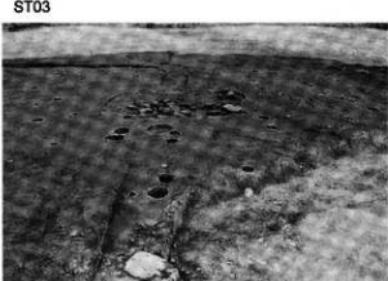
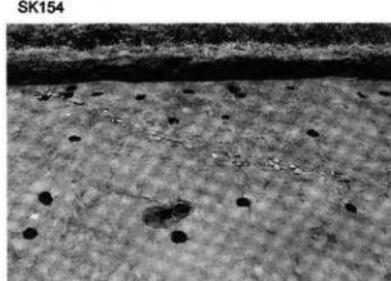
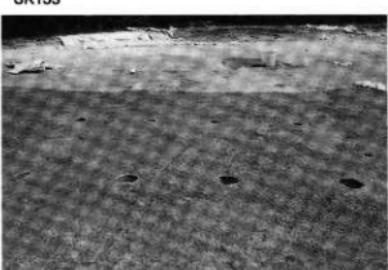
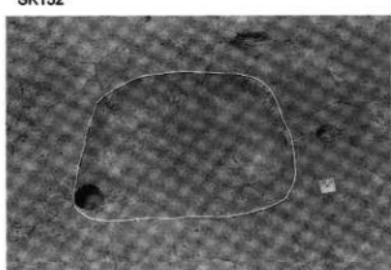
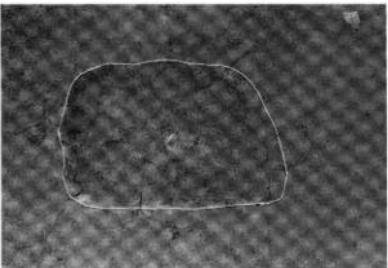
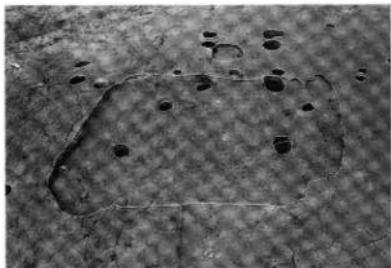
SK04



SK234



SK55





壺(No.1)



壺(No.7)



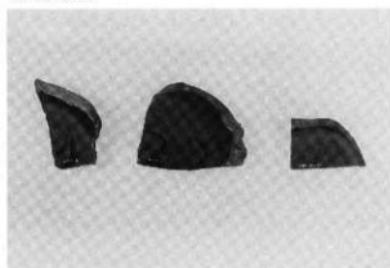
小型壺(No.18)



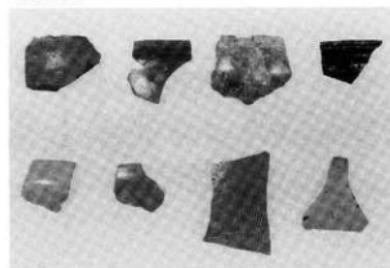
高壺(No.25)



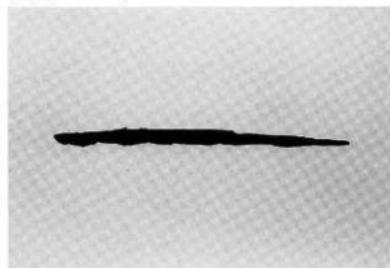
壺(No.21)



壺(No.39・38・37)



(左上からNo.55・50・52・51・56・54・34・灰輪)



刀子(No.26)

上田市文化財報告書 第72集

上沖（大沢）遺跡

国分産業団地造成工事に伴う発掘調査報告書

発行 平成10年8月31日

発行者 上田市土地開発公社

上田市教育委員会

印刷 株式会社上田ワードプロセス企画